

令和2年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成

～「伝統×伝統」、「伝統×現代」、「伝統×地域」のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指して～

三匹が行く

～ 金津流石関獅子躍の生まれたところと

今、躍ること～

Following the Footprints of Shishi

The birthplace of Kanatsu-Ryu Ishizeki Shishi-Odori and what it means to perform it now.



岩手県奥州市江刺石関・熊野神社例大祭 金津流石関獅子躍奉納

撮影 千田祥子 (2015年4月29日)

TCM



現在の宮城県と岩手県の県境と
江戸時代の仙台藩の盛岡藩の藩境

中央部にある富谷丘陵・松島丘陵を境に
東北最大の平野である仙台平野は
南北に分かれる

それらの丘陵と七北田丘陵の間を縫って
流れる七北田川の河岸に“松森”はある

古代から、そこは北上に連なる丘陵地帯と
南部へと開けた平野地帯との境界であった



安部靖氏の伝書の読解により、それまで宮城県旧松山町と言われてきた金津流獅子躍の発祥が、石関に関しては松山ではなく、宮城郡國分松森村（現在の仙台市泉区松森）であると判明した。

はじめに

これは、オンライン芸能村の村人3人が、2020年11月から2021年2月にかけて取り組んだ「金津流獅子躍」(かなつりゅう・ししおどり)と、その発祥の地「松森」についての、オンライン勉強会の記録です。

金津流石関獅子躍第14代中立を務め、現在は金津流獅子躍師匠として後進の指導に当たる安部靖さんと、行山流舞川鹿子躍(ぎょうざんりゅう・まいかわししおどり) 伝承者・東京鹿踊代表の小岩秀太郎さんに、2020年12月26日にお話を伺った中から、特に印象に残った点について調査・編集を加え、まとめました。

*

金津流石関獅子躍は、安永8年(1779)7月に、旧仙台藩江刺郡石関村(現在の岩手県奥州市江刺稲瀬)に伝えられた郷土芸能です。本物の鹿のツノを頭(かしら)につけ、背中には3mほどの竹に和紙を貼付けた“ササラ”と呼ばれるものを背負います。同時に、腰に下げた太鼓を踊り手自らが叩き、歌い、踊ります。この芸態は「太鼓踊り系鹿踊り」と呼ばれ、旧仙台藩領各地に伝わりました。

「シシ」とは古い言葉で「野獣の肉」のことを言います。人間が、食物としてその命をいただくシシへの、供養の意味が込められた踊り、とも言われます。

また「シシ」は神仏を守護する存在でもあり、神の使いの「鹿」のことでもあります。神や仏の化身として踊られる鹿踊りに、人々は五穀豊穰・国家安穏・悪魔退散といった祈りを託してきました。

お盆には、新盆を迎えた家々やお墓を廻り「墓回向」(はかえこう)と言われる追善供養を行うなど、地域によっては今も暮らしの中に根付いた踊りと言えます。

その鹿踊りの中でも、金津流という流派の発祥が、現在の宮城県仙台市北部に位置する泉区の松森地区とされています。このことは、前述の安部靖さんが独学で石関に残る鹿踊りの伝授書を読み解き、2004年頃に初めて明らかになりました。とはいえ、供養碑や伝書など、鹿踊りが踊られていた事実を示す資料は、現地では全く見つかっておらず、安部さんが引き続き研究を続けていらっしゃる最中です。

その上で、鹿踊りという芸能をタイムカプセルに見立て、現在の踊り手と交流し、互いに対話を重ねることで、松森の地や東北と出会い直してみたい。また、鹿踊りを様々な切り口から、知り・楽しみ・探求する、その可能性を広げることが、企画のねらいです。同時に、郷土芸能が好きな仲間が増えるきっかけの一つになれば、と願っています。

オンライン芸能村村人 千田祥子・及川ひろか・曾和聖太郎



岩手県奥州市江刺石関・熊野神社例大祭
金津流石関獅子躍奉納
撮影：千田祥子(2017年4月29日)

《 講 師 》

安部 靖 (あべ・やすし)

金津流獅子躍師匠・金津流石関獅子躍第14代中立

岩手県奥州市 (旧江刺市)稲瀬生まれ、奥州市江刺在住。旧江刺市役所入職後、鹿踊りの踊り組(サークル)を立ち上げた上司に誘われ、初めて鹿踊りを知る。当初は乗り気がしなかったがいざ始めてみると「これは結構おもしろい」「ずっと続けてみたい」と思うように。ちょうどその頃、地元稲瀬で鹿踊りを復活させる動きがあり、2001年、第14代として金津流石関獅子躍を復活させた立役者の一人となった。自分のやっている芸能はいったいどういうものなのか、と興味が湧き、石関に伝わる巻物(伝書)を3年かけ、独学で訳した。2011年5月、金津流獅子躍の発祥とわかった松森を初訪問。その後、自らも踊り続けながら、宮城県の郷土芸能研究の第一人者、故・千葉雄市先生や小岩秀太郎氏共に、太鼓踊り系鹿踊りの調査・研究に取り組み、現在に至る。



(C)佐々木隆二

小岩秀太郎 (こいわ・しゅうたろう)

行山流舞川鹿子躍伝承者・東京鹿踊代表
(公社) 全日本郷土芸能協会理事・縦糸横糸合同会社代表

岩手県一関市舞川生まれ、東京と東北の2拠点で活動。舞川に伝わる行山流の鹿踊りを、小学校の頃から始める。全日本郷土芸能協会は、全国の郷土芸能継承団体が加盟する社団法人。縦糸横糸合同会社は、震災における東北地域文化からの気づきや、先人の経験や教を、現代で再編集し、未来に伝えていくために設立。東北出身であること、郷土の芸能を伝えてきたことを常に活動の根元としている。安部靖氏とは2004年頃、金津流石関獅子躍ホームページの掲示板でのやりとりを通して出会った。



(c)Mayumi Hirata

《 村 人 》

千田祥子 (ちだ・しょうこ)

(公財) 音楽の力による復興センター・東北 コーディネーター／コーヒーと旅と本 主宰／音楽家
仙台市出身・在住。宮城県第一女子高等学校(現 宮城第一高等学校)、山形大学教育学部総合教育課程音楽文化コース音楽学専攻卒業。2012年一関・行山流舞川鹿子躍の練習を見学、鹿踊りを初めて知る。その後、この鹿踊りが仙台藩発祥であり、地元に近い仙台市青葉区八幡にある龍寶寺が、実は鹿踊りと縁が深いことを知り、一層鹿踊りに興味を持つようになった。現在は音楽と交流による復興支援活動のコーディネーターとして、岩手・宮城・福島を行き来している。

及川ひろか (おいかわ・ひろか)

(公財) 日本フィルハーモニー交響楽団 企画制作部
仙台市出身。松森小学校卒業。宮城県第二女子高等学校 (現 宮城県仙台二華高等学校) 卒業後、京都市立芸術大学音楽学部を経て、東京藝術大学大学院音楽文化学専攻 (アートマネジメント) 修了。現在はオーケストラにて教育活動や地域連携、東北への支援事業を担当する。東北の地域文化とオーケストラの交流を模索していた際、岩手県の大船渡で江戸時代から伝わる赤澤鎧剣舞を受け継ぐ小中学生と出会い、その堂々とした踊りに魅了され、芸能に関心を持つようになる。社会と音楽との繋ぎ手として、人と人が関わり合うコミュニケーションの場作りを行う。

曾和聖太郎 (そわ・しょうたろう)

映画作家

和歌山県出身、横浜市在住。

2018年に、かつて仙台市泉区の松森で踊られていたという今は無き鹿踊に関するリサーチを行い、現地のフィールドワーク及び、ワークショップの企画制作を行った。現在、腎不全の老犬 (16歳) を介護中。

理解を深めるための用語メモ

◆鹿踊りの流派

現代においていわゆる「鹿踊り」と言われている芸能は、大きく「太鼓踊り系鹿踊り」と「幕踊り系鹿踊り」に分けられ、太鼓踊り系鹿踊りには、行山流、金津流、春日流という大きく三つの流派が存在する。

◆金津流石関獅子躍（かなつりゅういしぜきししおどり）

金津流石関獅子躍は安永8年(1779)7月に、旧仙台領江刺郡石関村(現岩手県奥州市江刺稲瀬)に伝えられた郷土芸能で、岩手県内にある金津流鹿踊りの宗家である。昭和30年頃に一度途絶えたが、平成に入り梁川金津流鹿踊(現金津流野手崎獅子躍)初代”菊池司”等を師匠に招き復活を果たした。

◆行山流舞川鹿子躍（ぎょうざんりゅうまいかわししおどり）

岩手県一関市舞川に伝わる行山流の鹿踊り。宮城県南三陸町発祥とされる。

◆シシオドリの表記

踊り組によって「鹿踊」「鹿子躍」「獅子躍」などと表記が異なるが、全てシシオドリと読む。金津流では伝書に「獅子躍」と書かれており、これを正式としている。本記録集では、固有名詞以外は「鹿踊り」で統一した。

◆伝書

どの団体においても由来が記された伝書(伝授書・巻物)は、代々庭元(にわもと)の家に保管されていた。ただし石関の場合は、庭元の家に何かあってはいけないと、全て原本の他に二巻ずつ書き写された。また最近になって、庭元ではなく中立のみが伝授する伝書も見つかった。ある時代までは、伝書の有無、またその内容で踊り組の格が決まり、上下関係があったという。

◆中立(なかだち)

踊り組の中で中心的な役割を担い、踊りの指揮をする踊り手。

◆庭元(にわもと)

芸の家元にあたる存在。村の有力者が務めることが多かった。鹿踊りを踊るためのシシ頭・装束・太鼓などの道具は庭元の家で保管・管理され、踊りにかかる費用なども庭元の家が用意したという。ただし、石関の場合は、庭元の家が火事などの有事があった際のことを考え、踊り手個々に道具等を保管させていた。それでも、石関が平成に復活する直前に、庭元の家が火災に遭い、その後庭元も亡くなったことで、詳細を辿れなくなったこともあるという。歴史がある踊り組では、庭元が中立を務める場合も多い。

◆肝入(きもいり)

現代でいう村長に近い存在。庄屋、世話役。村の繁栄にかかる農作物の栽培方法や、新しい技術を持って来る、ということも行っていた。石関では肝入が庭元を兼ねていた。

◆庭元の他家への継承

庭元を担ってきた家が傾きそうな場合などに、庭元を他家に譲ることがあった。石関では庭元が何度か変わっている。その際、伝書は必ず原本ではなく、写しを作成して渡された。

◆松森村

現在の仙台市泉区松森にあった村。仙台平野北部に流れる七北田(ななきた)川流域に位置し、広い平野部の田圃を囲むように、北側東西の丘陵帯に住宅団地が広がっている。明治22年(1889年)に町村制が施行される以前は、宮城郡国分(こくぶん)32村1浜の内の一村であり、国分氏の居城であった松森城(鶴ヶ城)跡がある。金津流獅子躍発祥の地であるとされるが、現在鹿踊りの伝承は途絶えている。

松森の記憶と今

及川ひろか

平成3年に、松森に隣り合う丘の上に位置する鶴が丘に移り住み、18歳まで暮らしました。卒業した松森小学校の裏手には大きな山があり、高学年の時にはちょっとした課外活動で登った記憶があります。それが鶴ヶ城跡（松森城跡）です。当時も既にお城はありませんでしたが、桜が咲き誇り広々とした高台で感じる風は清々しいものでした。夏には友人たちと、松森にある熊野神社のお祭りに出かけました。しかし、遠足は、隣の利府町に続く「宮城県民の森」へ出かけることが多く、年月とともに鶴ヶ城跡のことを気にかけることはなくなっていきました。



鶴ヶ城跡から仙台港を臨む
撮影:千田祥子 (2020年12月29日)

その後、オーケストラの仕事を通して、剣舞（けんばい）や鹿踊りに出会い、「郷土芸能」をほとんど知らなかった私にとって、装束をまとい堂々とした踊りに”生”を感じ、惹かれていきました。

このオンライン勉強会を通して、岩手で踊られている金津流の鹿踊りの発祥が松森であるということを知り、とても驚きました。それまでそんな話を聞いたことがなかったからです。それもそのはず、安部さんが松森発祥だと突き止めたのは2004年、松森への初訪問は2011年ですから、私の上京前には知る由もありません。千田さん・曾和さんとのミーティングを重ね、松森の歴史を探っていくなかで、荒浜の漁師が松森の松を目印に漁から戻っていたということや、昔は鶴ヶ城跡一帯で軍事訓練がなされていたことなど、自分が育った地元を学び直すプロセスを通して、驚きとともに時空を超えて歴史 ロマンが広がっていくような、不思議な感覚にとらわれました。今の松森、鶴が丘からはとても想像がつかないような地域だったのではないだろうかということに、思いを馳せています。

安部さんや小岩さんのお話を通じて、「伝承」、形ないものを伝えていくとはどういうことなのか、もっと知りたくなりました。そして、松森で踊られていたという鹿踊りについて、さらにわかってきた時、今の松森小の子どもたちに伝えていくお手伝いができたら…そんな夢を見始めています。



現在の鶴が丘団地 (2021年1月)

松森にあったシシオドリ Shishi-Odori that existed in Matsumori

松森において金津流獅子躍が発祥したのは間違いない。
いつまで踊られていたのだろうか…？

Without a doubt, Kanatsu-Ryu Shishi-Odori originated in Matsumori.
Until when was it performed…?

及川 独学で伝書を解読したら、金津流の発祥がそれまで言われてきた松山（旧松山村・東北本線小牛田駅の1駅仙台寄りにある松山町駅の地域）ではなく、松森だとわかったということですね。

安部 金津流が松森から来たことがわかって、震災の年に松森の市民センターに行きました。その時のセンター長に巻物（伝書）の写しを見せて話をしたら、すごくびっくりされて。その後、「鶴が城自然プラザ」という活動をされている方達がすごく興味をもって、昔の松森について調べてくれました。報告書もいただいたんですけど、なかなか何も残っていないという。その後もずっと調査をしてたんですけど、松森にはある年からある年までの資料が一切ないそうなんです。人がいなかったという事情がわかった。

曾和 それはいつ頃のことなのでしょうか。

安部 私もよくわからないんですけど、松森の地で開拓か何かがあったらしく、当時は江刺からも人出が出て松森で何かをしていたというのが残っていたそうなんです。

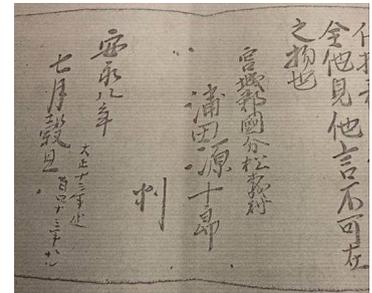
小岩 わざわざ開墾するくらい場所だったということなのかな。いくらでも住む所はあるだろうに、なんで松森だったんだろう。

安部 松森の地は山だったらしくて、狩猟、武術訓練の野初(のそめ)を行っていた場所だったという話を書き物に残っています。そこには獣がいたのではないかなと。今の町からはまったく想像もできないような環境の土地だったんじゃないかと勝手に想像します。松森の神社やお寺をけっこう歩いて回りましたが、今では完全に住宅地となり、松森の地は歴史溢れるというよりは、近代化が進んでいるように感じました。

曾和 及川さんの小学校の真裏がお城跡だったといいますが、その鶴ヶ城跡（鶴ヶ丘公園）に行ってみると、まさに山城の地形という感じでして。元々は国分氏の居城で、江戸時代以前からの城があった場所。城下にも人が住んでいたはずなので、一つの集落としては古くからある場所だと思うんです。七北田川自体が仙台平野の北限にあたるので、それ以北の山岳部とそれ以南の平野部を分ける境目にある地域だったんだと思いますね。

及川 松森小学校の他に鶴が丘小学校というのもあるんですけども、どちらも坂の頂上にあるんですね。平な所がなく全部坂なので、たしかに、昔はあの一帯が山だったんだろうなと思います。

安部 松森において金津流獅子躍が発祥したのは間違いない。それなら、いつまで踊られていたのだろうか？やはり調査が必要になりますね。



“宮城郡國分松森村 浦田源十郎” とある
（「金津流獅子躍本体之巻」より抜粋）



仙台平野側からとらえた 鶴ヶ城跡 (2021年2月)



鶴ヶ城跡看板 (2020年12月29日)

人を渡り、山川を越えるシシ達 Shishi that migrate from person to person, across mountains and rivers

こんな踊りはどうやって生まれたのだろうか？踊ってる最中でも考える。
芸能とは？信仰とは？とか、今でも考えますー

How did a dance like this come about? I wonder about it even while dancing.
What is a performing art? What is faith? I still think about these things.

曾和 金津流の祖は犬飼清蔵長明（ながあき）さんという、七北田村の村長でもあった方だということですね。

安部 私の調査で、今まで犬飼清蔵長明が金津流の祖だと言われてきましたが、実際にはその二代前の犬飼長久（ながひさ）という人が、獅子神楽（ししかぐら）に金津流の「25か条の決まり（金津流獅子躍伝授之目録）」を付けて金津流獅子躍にしたことがわかってきました。その前、犬飼清蔵成久（なりひさ）という人の時に、どうやら踊りが伝承されたみたいだということがわかった。これ、なぜ芸能が武家で伝承されたのかというのは一種の謎ですけど、でもたぶん今うちがやってる形態を見る限りでは、武士の余技(戦のための訓練)でなかったのか、というのが一番納得いくところ。例えば旗差し(甲冑の背中に着ける旗の指物)がササラに見えたりとか、鎧を着ればそれなりの重さ、15kgくらいになるので、重い衣装を着て訓練していた。訓練として芸能を続けたんじゃないか、というのがもっともらしい話かなと思います。それが後々、武士でなく農民に伝わっていき、権威付けと箔を付けるために武士の名前をもって伝授書なんかを貰ったんじゃないかと。



江刺石関・熊野神社例大祭 (2017年4月29日)

小岩 石関は藩の境だったから、なんとなく、武士のものを取り入れたとか、稽古するためにというのは、今の金津流の形態、ぴったり揃った足さばきとか、グタツとしないところとか、型ができてるといいうのがわかるんだけど、行山流はそこまで型がしっかりしてないんですね。行山流は流派としては古いんだけど、それぞれの踊りがあって、あまり型が決まっていないというのもあるんだけど…、金津流が松森で武士の嗜みというか、稽古をするために生まれてきたのか？あるいは藩境、石関の方に行ってからあの形になったのかわからない。その前の石関をみていると、そこまで武士というのは、しっかり獅子躍りしなさいよ、というような感

じではないような気がする。山伏神楽も入ってるような気がするから、そこらへんは、行山流から金津流へ変異、変わっていったり、いろんなものがくっついていった中で、誰が何をやってきたのか、というのはあるし、仙台から北に上がって行った時にどうなったのかな、というのは気になりますね。

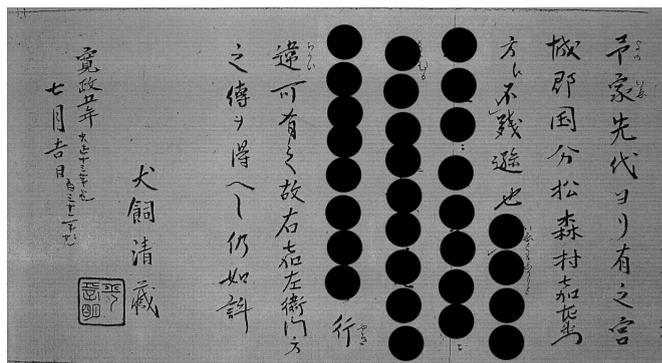
安部 そうですね。それにしても、私が携わる芸能が200年、300年前からの伝承というのがやはり不思議に思います。こんな踊りはどうやって生まれたのだろうか？踊ってる最中でも考える。昔からそうだったと言われても恐らくそうではないよねとか…。芸能とは？信仰とは？とか、今でも考えます。

調べれば調べるほど謎が増えてきます。まんつ不思議なことだらけ…。
あらゆる角度でみないと点と点が繋がらない…。

The more I research, the more mysteries I find. It's full of inexplicable things.
We have to look at it from every possible angle. Otherwise, we cannot connect the dots.

千田 いつの頃までが武家への伝承だったのでしょうか、足軽だけでなく農民にも踊られていたのですよね？

安部 清蔵という名は犬飼家で代々襲名されているもので、最初に出てくる犬飼清蔵重久（しげひさ）が、大阪の陣で、砲術を使って手柄をとったようです。それ以降、犬飼家というのは砲術、弓術とか武道をやっていた。それから江戸時代中期頃、うちの石関獅子躍の書き物に出てくる代の清蔵さん（犬飼清蔵長明）が、武術と銃術とかの他にも芸能をすごくがんばった人で、四十代後半くらいから、北上の相去村の番所、いわゆる仙台藩と盛岡藩の藩境へ足軽頭として赴任したらしいということがわかっています。



“犬飼清蔵から松森村の嘉左衛門へ伝授された”とある
（「金津流獅子躍傳授之目録」より抜粋）

その清蔵さんの後から、すっかり武士でなく農民に踊られて

ていたと。金津流の巻物には、清蔵さんの弟子で嘉左衛門（かざえもん）という人が出てくるんですけど、嘉左衛門はどうやら武士じゃなかった。その人に「獅子躍の一切を伝授しましたよ。何かあったらその人に聞いてくださいよ」とうちの巻物（伝書）に書いてあります。

清蔵さんという人は、なんか人柄が良かったのかわからないですけど、すごい弟子の数が多かった。弟子もすごくよく働いたと。いわゆるカリスマ的存在で「犬飼清蔵はすごかったんだ」というのが昔の文献に書いてあるんです。

小岩 うちの行山流は、あまり武士は関係していなかったかなと思うんです。舞川の元祖は吉田猪太郎というんですけど、吉田の家が何やっていたかわかっていないんですね。馬洗淵（まらいぶち）という地名なので、街道沿いでそこで馬休ませる場所だったのか、山間の地域で、川に沿ってちょうど山が出張ってるところから山越えして、次の町に向かかっていくちょうど峠のところなんですよ。何か商売系をやっていたのか…沿岸まで巻物もっていったりしてますからね。北上川系統から金とかの鉱物か何か持って上がっていったのか。

舞川辺りでは鉄砲打ち（てっぽうぶち）が結構多かったので、火薬を扱えるのとか狩りをするのとかに関係する人たちのネットワークがあったのではないかという気もしてるんですよ。

安部 実際、猟師、山立（やまだち。マタギのことを仙台藩では山立猟師と呼んだ）の繋がりはかなりあったんだろうと思われるし、金山繋がり、山の出稼ぎというのは結構あって、岩手の沿岸と内陸部もやっぱ山関係、金山関係で出稼ぎに来ていて、そこから鹿踊りを教わったという団体もあるのではないかと。山立なんかは、山を歩いて、山から山へと移動していくのでね。

小岩 水戸辺（みとべ）やその近くの、志津川の入谷（いりや）から伝わったという話が大船渡はじめ沿岸地方の鹿踊りの伝承のほとんどなので。そこらへんは修験の山とかも多いし、関係してるんじゃないかなと思いますけれど。仙台の町中の話と、金津流と行山流の話と、どこでどう接点があって、どこで分かれたのかみたいなのは、もうちょっと今後探って行けたらと思いますね。

安部 調べれば調べるほど謎が増えてきます。まんつ不思議なことだらけ…。調査する際、ピンポイントで調べても分からない事が多いです…。周辺や時代状況とかあらゆる角度でみないと点と点が繋がらない…。

神様を宿して踊る、祈りの踊り A dance of prayer, performed as a medium for the gods

頭を被る事により、私たちは「神様と人間の間に立つ」と言われます。
シシ頭の幕の中で、風を感じた事が今まで三度あります

It is believed that wearing the headgear places us between gods and humans.
Three times in my life, I have felt wind while performing, dressed as a shishi.

及川 以前、安部さんが、人間ではないものになる、神様を宿すとお話されているインタビュー映像を拝見しました。クラシック音楽の世界では、演奏者がお客さんに披露する、またお客さんと一緒にその場の空気を作っていく、ということがあります。一方、鹿踊りを踊る際に、神様を宿して人間ではないものになるというのは、どういうお気持ちなのでしょうか。また、見ている人のことはどのように感じられているのでしょうか。

安部 根本的な話をする、まず“芸能の在り方”というのがあると思います。金津流石関獅子躍は、基本、神事なので、あくまで神様に対しての祈りを込めた踊りであり、見る人がいようがいまいが関係ない、というのが本来の在り方です。明治期になると娯楽の役割も入ってきて、人の前で踊るようになった。そこで、形態や踊り方が変わってきて、観客に見せる踊りを作って、今に至っています。それがいいかどうかは別として、拍手をもらおうと踊り手としてはもちろんすごく嬉しいわけで。でも、本来あるべき姿を踊り手が忘れてしまったのでは、この芸能は何のためにあるのですか？という話になる。今年はコロナの影響で何のための芸能なんだと、特に見直すきっかけになりましたね。

千田 神を宿す、についてですが、頭（かしら）を被り、装束をつけ、ササラを背負うことで、ご自身が“依り代（よりしろ）”となるような感覚もあつたりするのでしょうか…？

安部 頭（かしら）を被る事により、私たちは「神様と人間の間に立つ」と言われます。私は…信じる信じないはその人次第ですが…、風のない日で、シシ頭の幕の中にも関わらず、風を感じた事が今まで三度あります。金津流石関獅子躍を復活した時の開眼供養、相伝式、供養碑建立の時です。開眼供養ではもう1人も感じたようでした。またある日は、太腿を肉離れた状態で公演に立たねばならず、最悪動かずに、歌と太鼓だけでとを考えていたら、始まると痛みは消えて踊る事ができました。まあ、これはアドレナリンの影響かもしれませんがね。道具をおろした途端に、痛みが酷かったです。各団体にも、色んな逸話や不思議話がありますよ。踊る人にしかわからない感覚なのかもしれません。



金津流石関獅子躍14代供養碑



供養碑建立之儀の場面 (2011年9月25日)
写真提供 金津流石関獅子躍保存会

神事芸能としての意識 Attitude as a performing art dedicated to the gods

頭というのは神様仏様の仮の姿、頭そのものが神様だからちゃんと大事にしましょうと。

The headgear is a provisional form for divine entities. The headgear itself becomes a god.
Therefore, let's treat it with respect.

小岩 特に鹿踊りの中でも金津流さんは、神事芸能として踊るという意識を、ちゃんと段取りを持って踊り手の内に育てていく。それを、今も守ってるんですね。もう一つは、シシ頭を大事にしている。「頭というのは神様仏様の仮の姿、頭そのものが神様だから、ちゃんと大事にしましょう」と。お札（ふだ）みたいなものですね。そうすると「パフォーマンスとして踊ってもいいけれど、少なくともシシ頭は神様だから大事にしようね」となる。そこに戻ってくる意識が、ちゃんと踊らないといけな、という気にさせてるんだらうなと思います。今も、靖さんの後ろにシシ頭があるんですけど、それは縦糸横糸合同会社の仙台の事務所に舞川から持参したシシ頭を置いていて、普段はほとんど僕ら事務所にはないはずなのに、そんなところに置いていて（苦笑）。神様仏様がそこに込められてることを考えれば、適当に扱うことはできないはずなのに。そこがうち（行山流舞川鹿子躍）や多くの鹿踊り団体からは、もう抜けてしまったところで、本当はそこに、民俗芸能がつなぎとめている“何か”があるんだと思います。

千田 シシ頭の扱いについて決められていることは、例えばどんなことですか？

安部 基本的には「シシ頭を跨いではいけない」と、師匠に言われましたね。あくまで神様なんであり得ない。あとは道具を投げたり、落としてはいけない。「跨いだら、お前は踊り手失格だ」と指導されました。うちの伝書の中には、使わないときは箱にしまいなさい、と書いてあります。

千田 「踊り始め」と「踊り納め」の儀式は、今はどのようにされているんですか？

安部 私たちの代の頃は、「踊り納め」は、まず一回踊りをするんですよ。それからシシ頭を神棚に奉って、ありがとうございます、という儀式を歌と太鼓でやります。「踊り始め」の時は、最初にシシ頭を奉って、これから踊らせていただきますよという儀式をしてから、まず最初の踊りをしていた。でも、今の代の弟子たちはそういうスペースもないということもあるけれど、そういった踊りはしていないです。

小岩 舞川では、やっていません。庭元制を昭和の30年代でやめてしまって、保存会に切り替えたので、いわゆる儀式的なものはやらなくなったんですね。戦後は、地域のために頑張らないといけなかった。そして鹿踊りは岩手を代表するものだから、観光PRに活かしていきたいと、県外で披露する機会が作られていった。その中で、信仰や神事のため、といった儀式はおろそかになっていったのだと思います。金津流や鬼剣舞（おにけんばい）は、観光的な視点で舞台に出るということも一生懸命にやっている。一方で、ちゃんとお盆の時にはお墓での供養とか、神事奉納もしている。あと岩手県北上市の「みちのく芸能祭り」。60年続く観光の祭りなんだけれど、芸能のことを広く皆さんに知ってもらうための祭り。（受け継がれてきた）意識はある。儀式もどちらもちゃんとやっていきます、と。（舞川のある）一関はその辺が、やっぱり都会である仙台に近くて、目立つことや、観光的なことをやろうという感じに行ったんだけど、少なくとも私が東京鹿踊を作ったり、郷土芸能の世界に足を踏み入れたからには、そういった儀式とか歌とかも、ちゃんとやっていきたいので、知っているなりのことをやろうねという方向で、ここ10年くらいきました。

千田 年の始めと終わりに、そういう場を持つ。それは、どういう必要性を感じてでしょうね。

安部 やっぱり神事から娯楽芸能に変わるあたりに、ちゃんと儀式を守ろうねという考え方があったんだと思う。

小岩 あと、うるさい人がいたわけですよ。「ちゃんとやりなさいよ」という“うるさいおじいさん”（役）がいたんですよ。だから、これからは、靖さんが、みんなにとってそういう存在になっていく必要があるわけですよ。

一同 （笑）

コロナ禍の冬に考えたこと

千田祥子

2020年は、新型コロナウイルス感染症の流行により、人の多く集まるイベントが悉く中止されていった一年でした。ここ数年、季節ごとの各地の祭りや、郷土芸能奉納を訪ね、友人たちとその土地の匂をいただくことが、生活の一部、日々の楽しみとなっていた私には、本当に寂しく物足りない一年でした。

とはいえ、その最中にも工夫をしながら、お祭りをされる地域もありました。その様子を新聞や友人たちのSNSで知りながら、祭りや稽古を続けていく、ということや、これまで遠くから訪ねていた「観光客」「ファン」であった自分自身についても、改めて考える時間ができました。

その中でこの「オンライン芸能村」を知り、仲間を得て、これまでも親しくさせていただいていた伝承者のお二人に、改めてじっくりお話を伺う機会が持てました。

日本全国に共通した人口減少、高齢過疎化の流れ。10年前の東日本大震災によって、東北はよりそのスピードが早回しになりました。「郷土芸能を今のまま残していくことは難しい。それでも、意識は残していけるのでは。」お二人の口をついて出た言葉は、心に重く響きました。何を思い、何を大事にし、誰に向かって祈り踊ってきたのか。継承するということ、それは、関わる全ての人が、その芸能がここまで伝えられてきたこと、全てへの「感謝」を、この先も忘れずにいられるかどうか、かかっているのではないのでしょうか。



熊野神社参道入口 (2015年4月29日)

またある時、4歳になる姪が、私が毎日体温を記録する、表紙と葉つきのきれいなメモノートを「これ、聖書なの」と大事そうに、にこにこ手に取りました(彼女はまだ、字がちゃんとは読めません)。保育園の先生たちが、大切に扱うのをいつも目にしている聖書。きれいな表紙の小さな本は、彼女にとってその聖書と同じに「なにか大事なもの」と目に映ったようです。みんなと礼拝で歌う短い讃美歌を、不意にハナウタで聴かせてくれることもあります。曆に定められた祝祭日の”礼拝を守ること”を、先生方は園のブログにもよく報告されており、礼拝を”守る”という言い方をするんだ、と初めて知りました。そうした園での日常の積み重ねが、彼女の中に信仰心を育てていくのだな、と傍で興味深く見守っています。

祭りを守ること、郷土芸能を継承していくことも、目の前でその祭り・芸能への思いをどう顕すか、その姿やその場の空気を、次の世代にどう見せ、伝えていくか、そしてそれを、どう受け取るか。その一人ひとり、一瞬一瞬にかかっているのだろうか、と、お二人の話を聞き、目の前の姪の笑顔を見ながら、共通するものを感じた冬でした。

伝承～郷土芸能を残していくということ Tradition—passing down of local performing arts

パフォーミングアーツとしてではなく、意識を残すこれからの芸能

Performing arts from now on—passing it down not as a performing art, but as an attitude

及川 クラシック音楽は何百年も前に作られた作品も楽譜という文献を通して演奏し続けていますが、カタチのない芸能が100年後も残るために心がけていることなどありますでしょうか。

安部 すごく重要な話です。“芸能が残っていく”ということは、踊り手だけの話ではないのです。地域の人々の関わり方が芸能の伝承に大きく関わってきます。実際、民俗芸能は一回途絶えてからの復活というのが多いので、伝承地にかにそういう思いがあるかでしかないんですよね。現代において信仰心というのがかなり薄れてきている中で、芸能は残るのか、と。100年後にはなくなってるんじゃないかと思うような今の状態です。それから大切なのは、私から次の代にしっかり譲る、伝える、ということです。弟子にはちゃんと指導する、それしかない。今では映像記録も残せるので、記録保存もちゃんとするようにしています。

小岩 こういった芸能は無形と言われますね。とはいえ、シシ頭とか道具は有形なので、形としては残せるけれど、踊りはその瞬間でしかないのです。踊り自体は残せないですよね。あともう20年くらいすると子供たちもほとんどいなくなって地域が崩壊していくということを考えると、伝承者自体が増えることはもうなくて、芸能の消滅は間違いなく起こっていくと思うんですね。完全な形で同じようなことを伝えていくことは絶対できないですけども、「靖さんみたいな人がいた」とか「鹿踊りというのを誰かが作ったらしい」ということを、言い続けることはできるんじゃないかと。誰が何のために作ったんだっけという話を、こういう場所で話していくことは大事だし、伝承地だけでは語り継げないことを伝えていってもらえたら、それは残っていくと思うので。パフォーミングアーツとして残していくのは難しいけれど、“意識”を残していくことはできる。それがこれからの民俗芸能かなと思いますね。



熊野神社参道行列 (2015年4月29日)

安部 ただただだけでなく、こういう芸能がここにあったよ、と伝えてもらいたい。それだけで十分価値はあるんじゃないかと思います。芸能を伝承するということは簡単な事ではありません。ただ踊るだけでもダメなんです。何を想い、何を感じ、何をするか。そこには『志』と『覚悟』が必要になります。芸能を伝承する為にはブレてはいけないんですよ。100年後を考えずに、まず次の代にしっかり伝承する事が大事だと思います。

見ている人が、踊る側にちょっと触れられる、その感覚をね

The audience catches a glimpse of the performing side. It's about that sensation.

曾和 無形であるということですが、踊りというか、身体でやることの面白さというのは、文物で残っていることではない面白さ、重要性というのがあると思うんです。つまり上手く言語化はできないけれど、“身体的な感覚としてでしか残せないもの”というのが、踊りの中に入っていると思うんですよね。身体でやることの面白さというのは、踊っている人間も、見ている人間も、等しく身体を持っているということ。踊っている人は、訓練によって得た身体的技法を持っていて、ある特別な所作、踊りができるかもしれないけれど、その踊りを見ている人の肉体や知覚も同時に踊ってるわけですよね。感覚が踊っている。その時に、その感覚が伝播して、伝承されているということが、身体表現のコアに絶対あるはずですよ。もちろん“型”は器として大切なんですけど、その器に入っている“感覚そのもの”が残っていく、注ぎ注がれていくことが本当に大事なことになるのかもしれないなあと。それは踊りでしかできないことかもしれないですよ。

安部 まさにその通りで、もちろん自分で歌って、自分で太鼓を叩いて、踊る。一人三役やるわけで、やっぱりやった人にしかわからない感覚というのはかなり多い。そのかわり、やった人にしか感じられない充実感というのがあるわけですよね。それは見てる人はわからない。15kgの道具を付けて踊ってどうなの、すごいね、でだいたい終わっちゃうんですけど、それじゃ、それを体験してみませんか、と。今、ワークショップなんか流行ってるんですけど、道具を付けさせて、ちょっと踊ってみようという、そういう経験をする機会を設けるというのも、やっぱり大事なのかなと最近思ってるんです。そうすると、実際には基本的には見ている人が、踊る側にちょっと触れられる、その感覚をね。今後、ちょっとそういう機会を設けていきたいとは思ってますね。

千田 小岩さんは、東京でやっていてどうですか？

小岩 東京でやっていても同じですよ。自分たちで体験してみるというか、そういう身体になってみる、なってみて“意識してみる”ということに繋がるんだろうなと思うんです。その中から、踊りそのもの、今教えてる踊りそのものを完璧に取り入れるという感覚ではなくて、こういうものはどこで生まれたんだろうな、という感覚を持ってもらうというのが必要というか、芸能を教えたり感じたりしたりするときに大事な感覚なんだと思うんです。これは山の端でできたんだろうな、みたいな意識を持って踊っていくことを考えられるようなワークショップ、やるんだしたら、そういったことも含めて感じたり考えたりできるものをやりたいなと思っています。



東京鹿踊 東京都新宿 西向天神社例祭奉納にて (2019年5月20日)
〈装束等は行山流舞川鹿子躍のもの〉



宮本卯之助商店 (東京浅草) 外国人向け鹿踊WS (2017年)

〈編集後記〉

不思議だ。この鹿踊りを巡るオンライン勉強会の書き起こしに出てくる一人の男、犬飼清蔵長明。

280年ほど前に、七北田川の辺りに住んだというその男が、安部靖氏のいる石関など旧仙台藩領北部に広がる金津流獅子躍を伝えたという。

犬飼清蔵長明は、寛保2年(1742)に弓術や砲術を伝える足軽の家に生まれた。十代の半ばには、東北を襲った宝暦の大飢饉(1755-1757)を経験している。多雨と冷害によって引き起こされたというこの大凶作は、東北一帯に甚大な被害をもたらし、約5万人から6万人の餓死者が出たとされる。その4年後、長明の兄が三十歳で亡くなった。長明十九歳の時のことである。長明は後に犬飼家で代々襲名されてきた「犬飼清蔵」という名を継ぐことになるが、兄が生きていたならば兄がその名跡を継承していたかもしれない。犬飼清蔵を継いだ長明は、砲術等の武術に加えて、金津流の獅子躍を修め、寛政元年(1789)四七歳の時、仙台領と盛岡領の藩境、上胆沢郡相去村の番所へ足軽頭として赴任した。同年に父一長が亡くなっているが、この直前、天明3年から8年(1783-1788)にかけて、再び東北を大飢饉が襲っている。この天命の大飢饉では、盛岡藩は藩の総人口の4分の1に当たる75,000人を超える死者を出したという。

かように犬飼清蔵長明が鹿踊りを踊った時代の東北は、天候不順や冷害、また火山の噴火による火山灰などによって、まさに飢饉また飢饉の連続であり、農民にとっては実に過酷な時代であったと言わねばならない。

亡くなる直前まで藩境の番所で勤めた犬飼清蔵長明は、その地でも鹿踊りを伝えたようである。また、七北田川の辺りにある時には、松森村の嘉左衛門という農民に鹿踊りを伝承している。

犬飼清蔵長明とは、一体どういった人であったのだろうか。どういった思いでシシ頭を被り、太鼓を打ち、地を踏んでいたのだろうか。松森で、赴任した地で、どのように弟子に向かい合っていたのだろうか。

安部氏らが伝書等を読み解いたことで浮かび上がってきたこの犬飼清蔵長明という一人の男の人生が、鹿踊りという鎮魂と豊穰の芸能に生々しい陰影を与えているようにも思われてくる。今回「郷土芸能が消滅していく運命にあるかもしれない」「次の代の弟子に伝えるということ以外にない」という話もあったが、これはもしかしたら犬飼清蔵の時代もそうだったかもしれず、それはむしろ芸能が生きている証なのかもしれない。

そして、彼が松森や石関へ鹿踊りを伝えたことで、250年以上経って、我々がコロナ禍の時代にオンラインで語り合っているのだ。いわば犬飼清蔵が繋いだ不思議な縁である。

改めまして、今回、惜しげもなくご自身の研鑽と研究の成果をもって、様々な質問に答えてくださった安部靖氏と小岩秀太郎氏に感謝申し上げます。また、この冊子を手にとってくださった方々との縁もまた広がっていくことを心から願っております。

曾和聖太郎



2020年12月26日 オンライン勉強会 (zoom) 仙台・東京・横浜

【引用・参考文献】

- ・金津流石関獅子躍ホームページ <http://ishizekishishi.flier.jp>
- ・書籍「百鹿繚乱 えさし鹿踊図鑑」(2013年)
発行者-自律的まちづくりモデル創出支援事業委員会(事務局:奥州商工会議所江刺支所)
監修-江刺鹿踊保存会
- ・第3回国連防災世界会議仙台直前イベント「ひとのちから」来場者配布資料
(2015年2月1日, せんだいメディアテーク)
主催-仙台市, 企画-(公財)音楽の力による復興センター・東北, 出演-金津流石関獅子躍ほか

【資料提供】

- ・「獅子躍本体之巻」「金津流石関獅子躍傳授之目録」(いずれも写し・一部) 金津流獅子躍師匠 安部靖氏

発行日 2021年2月28日

監修 安部靖・小岩秀太郎

編集 千田祥子・及川ひろか・曾和聖太郎

地図制作 曾和聖太郎

TCM

Tokyo College of Music

東京音楽大学